江戸日本の街道探訪　第14回

中山道　草津宿まで

■1　地図中山道美濃16宿

木曽路の終わり

* 旅人が、崖にへばりついて木橋を渡る､眼下に木曽川が流れ命がけの渡り道、いわゆる「木曽の」を無事に渡りきる。中山道は木曽川に沿ってさらに南下する。しばらく行くとに到着。ここは旅籠35軒、人口約2500人の宿場で、上町、本町、仲町、下町に分かれ構成されている。山中の宿場でこの繁栄。その理由は、ここが木曽檜の集積地であったからである。大量の檜材が筏に組まれて木曽川を下る。
* 上松宿を出ると直ぐに木曽川の支流、滑川を渡る。すると左側に「小野の滝」が見えてくる。ここは木曽八景の一つで、広重も英泉もこの滝を入れて上松宿を描いている。その後、中山道は再び木曽川に接近する。
* ■２　広重「上松宿」小野の滝。神秘の自然を描く

妻籠宿

* 上松宿から2８㎞。須原、野尻､三留野宿を経て木曽路を代表する妻籠宿に到達する。大河、木曽川は西へ走り、中山道は南方向の山道を行く。妻籠宿の入り口。右折すると宿場が見えてくる。宿は北の入り口から南へと細長く展開。が沿って流れる。宿場に入る。中頃に妻籠宿本陣がある。天保年間の宿場の規模は本陣1，脇本陣1，旅籠31軒で木曽路11宿の中で平均的。しかし、妻籠は類い希な歴史価値を持ち、重要な軍略上の拠点であった。鎌倉時代には妻籠城が築城され、いわば城下町として発展。戦国時代は木曽氏が木曽路の祖型を造る。妻籠宿の原型はこのころから造成。支配者は目まぐるしく変わる。信玄、信長、秀吉、家康と。妻籠宿は木曽谷の中心的役割を担う。関ヶ原の戦いの時には、中山道を進軍してきた徳川秀忠の軍を妻籠城に向かえ入れ、秀忠は当地で東軍の勝利を知ったと云われる。
* 格調の高い本陣は、江戸期に入って妻籠宿開宿に尽力した島崎氏が歴任。最後の本陣職は島崎藤村の兄、広助が担当している。旅籠では代々生業として経営してきた家柄の上嵯峨屋、下嵯峨屋。室町時代創建の光徳寺など由緒ある建物が今日まで残っている。

馬籠宿

* 中山道は蘭川を渡りなおも南へ下る。下り谷の一里塚。険しい道が続く。ここは大雨による土砂崩れや水害が多発する処。途中、熊野古道に見られるような、小さな観音像が立っている。その後、男滝、女滝の名勝。この滝は、落差こそ、あまり無いが、水量は豊富で優美。そして（一石栃立場番所）に着く。ここは伐採禁止木の出荷を監視する番所である。江戸時代、木曽の木を持ち出すと「木一本首ひとつ」と云われるほど罰則が厳しかった。中山道は登りに入る。馬籠峠（標高８００ｍ）。妻籠宿からは４００ｍ登ってきた。頂上からは木曽山脈の絶景が拝める。この峠を南に下ると、すぐに馬籠宿（標高６００ｍ）がある。
* 馬籠宿は島崎藤村の故郷。小説「夜明け前」は、ここを舞台にしている。本陣1，脇本陣1，旅籠18軒。この本陣こそ、島崎藤村の生家なのである。島崎家が代々本陣を経営してきた。山側の入り口から入ると、そこに高札場があり、宿場が始まる。脇本陣、本陣が並び、旅籠が続く。京都側の下入り口に至る道程が鍵型に直角に曲がってい、城郭の枡形御門構造になっている。小規模ながら城下町形式である。宿場を出るとちょっと行った左側に馬籠城があった。この城は室町時代から在り、木曽氏の統括で藤村の先祖、島崎家が管理していた。江戸になって家康は中山道を整備。ここを重要な宿場駅に指定した次第である。以上、この馬籠宿までが木曽11宿、木曽路である。
* ■３　英泉：馬籠の宿を中央、眼下に見る。牛に横乗りの人、足こしらえの人、駕籠を担ぐ人。馬籠峠を下って宿に下りる。

美濃16宿

* 中山道はこれより美濃を通る30里（約１２０ｋｍ）の旅に入る。この間の宿場は、美濃16宿と呼ばれる。落合、中津川、大井、、細久手、伏見、太田、鵜沼、加納、、、赤坂、垂井、関ヶ原、今須の1６宿である。
* 馬籠宿を出て、山間の道を南西に下ると落合の石畳を抜け、４ｋｍで落合宿に達する。それから１０㎞で中津川宿だ。中山道を挟んで右側に本陣、左側に脇本陣。中津川の豊かな水の恵みで広い田が広がっている。中津川渓谷は類い希な美しさ。中山道は中津川を渡って西へ。拓けた田園の道をどんどん行くと13㎞で大井宿に達する。ここは大井城の城下町として発展した宿場だが、名古屋、伊勢に向かう下街道との分岐点で、交通の要衝である。それゆえ41軒の旅籠を有し、美濃16宿中、随一の賑わいを見せた。

西行塚

* 大井宿を出て、の美しい里道を歩く。すぐに「西行硯水」に出くわす。1186年西行は二度目の奥州の旅に出た。鎌倉で頼朝に会い、平泉に1年滞在。帰りは、木曽路を経てこの地を訪れ、3年暮らしたと云われる。西行は恵那の美しい自然を愛した。中山道沿いにある西行硯水と呼ばれる処で、彼はこんこんと湧き出る泉の水を汲み、墨をすって、多くの歌を書いたという。そしてその近くに西行塚がある。恵那を一望できる小高い丘に塚が築かれており､塚の上には高さ１．４ｍの五輪塔が立つ。西行の遺骸は、近隣の長国寺で葬送され、この西行塚に葬られたという。西行は1190年大阪府弘川寺で最後を迎えたというのが通説であるが、恐らく、西行は、恵那の、この中山道界隈を晩年、こよなく愛でたに相違ない。ともかく江戸時代、中山道の名所の一つとなり､芭蕉も「西行のわらじもかかれ松の露」と詠んでいる（当地芭蕉句碑）。
* 美濃16宿は、西へ西への旅である。中山道十三峠を越え大湫宿を通過、琵琶峠を越え、細久手宿に。里山を満喫しながら西へ。再び木曽川に遭遇。「今戸の渡し場」から舟渡し。ついに木曽川を渡り、対岸沿いを西へ。すぐ太田宿に着く。それから17㎞歩いて鵜沼宿着。そのまま加納、河渡､美江寺、赤坂、垂井宿まで30㎞。垂井宿からは、東海道「宮宿」へ繋ぐ脇往還が出ており、その意味で此処は交通の要衝である。江戸時代の旅籠数は27軒で垂井城の城下町として発展。大欅の根元から湧出する名水、垂井の泉がそのまま地名になった。

関ヶ原宿

* ここから4㎞程行くと広い大地に出る。関ヶ原である。中山道は原のほぼ中央を走っている。関が原宿は関ヶ原東側の入り口付近から西へかけて中山道沿いに細長く展開。本陣１，脇本陣1，旅籠33軒。宿場は交通の要衝でもあり、江戸時代大いに栄えた。宿場の入り口近くには家康初陣のがある。宿の京口の東には、東首塚（家康が首実検した敵将の首塚）、京口から出た、すぐ右には西塚（無数の兵士の首塚）がある。そのちょっと先に、不破の関跡がある。673年、天武天皇の命で都を守るため、東山道に不破の関が設けられた。そして此処を起点に関西、関東と呼ぶようになったという。
* 中山道はこれから先、各将の陣地があった小高い山々の麓を抜けると、道は南に曲がる。その街道脇に常磐御前の墓がある。頼朝、義経の母、常磐は今若、牛若の後追い中山道を東への旅の途中、当地で山賊に襲われ亡くなったという。
* 関ヶ原から西へ4㎞で今須宿着。ここは江戸当時の人口が約1700人、本陣1，脇本陣２，旅籠13軒の小規模な宿場であるが、出口に立派な常夜灯が立つ。中山道は、さらに西へと山間を縫って進む。5㎞で柏原宿。里山の麓を通り、宿。此処まで来るともう琵琶湖は近い。
* 南に曲がる。番場宿。さらに南へを縫って進む。すると、北への本道、北国街道にぶつかる。さらに南へ。鳥居本宿、高宮宿、愛知川宿と続く。そして安土城、近江八幡の東側を通り、篠原､経由で草津宿に到着する。中山道は、ここで東海道と合流し、京都三条大橋に達する。